

最終試験の結果の要旨

報告番号	保研 第 26 号		氏名	前田則子
審査委員	主査	中尾 優子		
	副査	築瀬 誠	副査	牧迫 飛雄馬
	副査	西尾 育子	副査	山下 亜矢子

主査及び副査の5名は、令和3年7月7日11時00分から12時00分にかけて、学位申請者前田則子に対し、論文の内容について質疑応答を行うと共に、関連事項について試問を行った。

具体的には、以下のような質疑応答がなされ、いずれについても満足すべき回答を得ることができた。

質問1) 本調査において3因子が抽出され、『チームの志向性を高めるコミュニケーション(19項目)』『リーダーからのコミュニケーション(21項目)』、『BPSDチームの成長が促進されるコミュニケーション(15項目)』と命名したとあるが、3つの因子名すべてが「コミュニケーション」で括られている。3つともコミュニケーションで括ることになった背景と、どのような考え方からなのか説明せよ。

(回答) 本研究で用いる鍵概念の定義を決定した経緯から説明したい。本研究では、チームケアから概念化する。そして、BPSDケア技能をチームケアの中心概念として概念分析を行った。その結果、属性として「経験の浅い介護職のBPSDケアへの認知的技術的不安」「多様なメンバーで構成されるチームのチームケア管理」「チームベースのケア」「チーム内の相互作用」が抽出された。以上の検討より、BPSDチームケアの機能について、経験の浅い介護職の認知的技術的不安をサポートしながら、チームベースのBPSDケアを実践する役割機能、ケア実践の過程を促進するスタッフ間の相互作用と定義することとした。これにはすべてコミュニケーションが介在する。さらに、チーム概念は、Interdisciplinary teamに基づいており、これは、メンバー間の十分な協力と優れたコミュニケーションを重要視していることから、因子名にコミュニケーションを付加した。

質問2) チーム内のコミュニケーションの不足について、現場を見て実感として感じているのか

(回答) 平成27年に全国の高齢者福祉施設に従事する看護師1000名を対象に行った調査では、職種別に活動し、コミュニケーションを介した情報の共有ができていないという結果が得られたことから、チームとして機能していないことが伺えた。

質問3) チームケアを解決するための道具として使うことができるか

(回答) 実際に、これまで共同研究している社会福祉法人より、使ってみたいという要望があるので、まずは有用性を確認し公表していきたい。現状では、どの施設でも、毎日ミーティングは行っているが、職種の垣根を超えた形でこの尺度を採用してもらえるよう説明していきたい。また、今後、有用性を検討し、さらに対象数を増やし、汎用性の高い尺度へと洗練することが必要であると考えている。

質問4) 概念モデルとして採用したDickinson & McIntyreのチームワーク要素モデルについて、今回、明らかになった結果と合わせて説明せよ。

(回答) このモデルは、海軍を対象としたチームワークの各要素を測定する尺度である。この中のチーム形成期が、高齢者福祉施設において、当てはまると思われた。この時期には、《チームの志向性を高めるコミュニケーション》を通し、居心地の良さ、職場風土を高めるような職場環境づくりを行う。続いてモデルのリーダーシップ、モニタリングでは、今回の結果では《リーダーからのコミュニケーション》にモニタリングが含まれたが、行ったBPSDケアについて<メンバーのケアスキルを助けるリーダーシップ>で、未然に防ぐ形をとり、さらに<増悪防止の働きかけ>を行う。続いて、フィードバック、支援行動、相互調整にあたる部分として、今回の分析結果では、《BPSDの成長が促進されるコミュニケーション》の中で、行ったケアを振り返りフィードバックし、<心地よさにはたらきかけるケア技術>とした。

質問5) チームケアの意義として、看護スタッフから意図的な働きかけ、ケアの方向性の一一致、チームとしての協働体制の整備が必要とのこれまでの研究結果から導き出しているが、前回は、看護師を対象としており、今回の介護職を対象としたものとのつながりについて説明せよ。

(回答) 2017年に介護職を対象とした調査を実施し、チームケアが機能することが職務満足につながるということが示唆された。この結果と2018年の看護師を対象とした調査結果から、本研究の意義を見出した。

質問6) フォーカスグループインタビューを採用した理由について説明せよ。研究協力者は、BPSDケアにおいてネガティブな感情を今でも引きずっているおそれがある。倫理的に問題はないか。

(回答) フォーカスグループインタビューは、職位、職種ごとに分かれて実施した。5か所の介護老人福祉施設から研究協力者が参加した。日頃、ユニットで夜勤は一人体制のなかで、BPSDについて話をする機会が所内、所外ともなく、抱えている問題を共有し、よかつたなどの感想を述べる方が多かった。フォーカスグループインタビューのテーマは、「BPSDチームケアでうまくいったこと工夫した点」であり、あまりネガティブな感情を表出する場面はなかった。しかし、倫理的側面について配慮する必要があった。

質問7) 再テスト法について説明せよ。

(回答) 再テスト法は、本調査に継ぐ形で実施した。

質問8) 再テスト法の相関係数で0.5が3か所ある。級内相関係数になると0.2から0.3になることが想定されるが、信頼性は担保できているか説明せよ。

(回答) 信頼性の検討について、さらに級内相関係数を算出し、検者間信頼性により精度と再現性を検討する必要があった。

質問9) 43施設310名の回答から結果を導き出しているが、同じチームであっても違う評価をしている方々がいる。その場合、今回のデータを解釈してもいいのか。

(回答) 級内相関係数を算出し、検者間信頼性により精度と再現性を検討する必要があった。また、選択的バイアスの可能性も否めないので、対象数を増やし再調査し、汎用性の高い尺度へと洗練することが今後の課題である。

以上の結果から、5名の審査委員は本人が大学院博士後期課程修了者としての学力と識見を充分に具備しているものと判断し、博士（保健学）の学位を与えるに足る資格をもつものと認めた。